



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
© 1985 精進教育促進協会 (青函) 三二・三四五二 芦屋市船戸町12-6

教皇様の聲

生命——永遠の贈り物

子供、若者、高齢者、そして障害に苦しむ兄弟姉妹へ

親愛なる兄弟姉妹の皆さん。

1 今宵、私たちはイエズス・キリストにおける生活を祝うために集まりました。音楽とダンスに賑わうこのスタジアムで、老いも若きも、弱い人も強い人も全てひとつの家族として、またキリストにおいて一体となった友人として、生命の賜をくださった神を賛美しましょう。天地の創造主、生命を与えてくださる御方である主を、心を合わせ声を合わせて共に賛美しましょう。そして皆さん方の暖かい歓迎と、歌声や雰囲気に見られるこの溢れ出るような愛にお礼申し上げます。(…)

「法律の上でも、実生活の上でも、人種や血統、肌の色、文化、性別や宗教とかのために」(『オクトジェシマ・アドベニエンス』16)人を差別することがないようにと祈ります。このような差別はすべて、人間の尊厳を侮辱するものであり、人間の生命を卑しめるものですから。

今日は何よりもまず第一に、私たちに永遠の生命が与えられたことを祝いましょう。この永遠の生命は、イエズス・キリストがその

死と十字架とによって、私たちのために勝ちとってくださったものです。今宵の聖ヨハネ福音書の朗読の中で、イエズスは「私は命を、豊かな命を与えるために来た」(10・10)とおおせになつていきます。自然の生命も人間の生命も神がくださった高価な贈り物です。けれども、永遠の生命はさらに一層素晴らしい贈り物なのです。何しろ永遠に続く贈り物ですから。

洗礼の時にいただく恩寵は、私たちの生活の質を想像もできない程すばらしい極みにまで引き上げてくれます。つまりそれは、不滅の永遠に続く生命を受けるといふ保証をいただくこと。この永遠する生命はすでに始まっています。そして神のお言葉を信じることによって、また教会の数々の秘跡を通して、来るべき世において完成するのです。これこそ、聖パウロが描いた生命に外なりません。「目がまだ見えず、耳がまだ聞かず、人の心にまだ浮かばず、神がご自分を愛する人々のために準備されたこと」(コリント①2・9)なのです。今宵このスタジアムで私と共に生命をたた

えるために、子供たち、若い人々、年配の方方、それにいろいろな障害に苦しむ兄弟姉妹の皆さんにおいていただいたことを大変うれしく思っています。それぞれのグループの方方に順にお話させてください。

生命が真に意味するもの

2 愛する子供たち、そして若人の皆さん、最初にあなた方にお話ししましょう。みなさんの生命の真の意味について正しく考えなければなりません。人の生命は神から来るものです。あなた方がこの地上にいるのは、神があなた方をお造りになったからです。あなた方は神からつかわれ、神のものであり、そして神に帰るのです。神は生命の源であり目的地です。みなさんに自然の生命を与えられたお方は、豊かで活気に満ちたこの地上でみなさんが成長することをお望みになりました。神は色々な機会をとらえてみなさんを祝福してください。洗礼を通して、神はご自分の生命に与れるようにしてくださいました。つまり、みなさんを神の子としてくださったのです。それゆえみなさん方はキリストの兄弟であり姉妹です。

福音書に見られるように、イエズスは、この世には「盗み、殺し、滅ぼすためにだけ」(ヨハネ10・10)来る盗人がいるから気をつけなさいとおっしゃいました。こういう盗人たちがあなた方をだまそうとしていることは気づいていられるでしょう。人生の意味はできるだけ楽しむことにあるのだと言う人がいます。「この世が終わってしまえば後ははないのだから、今のうちに自分のためにできる限りのものをおくことだ」と思い込ませようとする人もいます。また、「大切なのは自分のことだけ、他人のことなど放っておけ」という声も耳に聞こえてきます。もっとひどくなると、「幸せとはお金を貯めることで、沢山の物を持つほど幸せになれる。つ

まらなくなったら、そのときはアルコールや麻薬という手がある」という人さえいるかも知れません。

このようなことはどれ一つとして真実ではありません。どれ一つとして、人生に真の喜びをもたらしてはくれないのです。真の人生は、自分自身や物質の中に見出すことができます。全く別のところに、つまりこの世の真、善、美なるものすべてをお造りになつたお方の中にはじめて見出すことができるのです。キリストは私たちに神をお示しになりました。キリストを知ることは神を知ることです。あなた方自身の姿、本当の自分自身を知るためには、キリストを知らなければなりません。これこそ、聖パウロが次のように叫んだ理由です。「実に主イエズス・キリストを知るといふ優れたことに比べれば、その他のことは何によらず損だと思ふ」(フィリッピ3・8)

みなさんの中にはカトリックの学校に通っていらっしゃる方々もおられると思います。なぜでしょう。それはきっと、カトリックの学校へ行く方がもっとた易くキリストに出会い、キリストにおいて人生の真の意味を悟ることが出来るから。その方が、悔いのない人生をおくる事が出来るからではないでしょうか。教会が学校を営んでいるのは、みなさん方にキリストのことを伝えたいからで、完全な人間であると同時に神の子であるキリストの中で、みなさんが精一杯成熟してくださるようにと望んでいるからです。

愛する子供たち、そして若いみなさん、キリストにお願いしてください。生命の神秘に驚くとき、キリストに頼めばその意味をますますとろなく説明してくださるでしょう。カナダや世界の将来のための自分の役割がわからないときには、キリストにたすねてください。キリストは(…)あなたがもっている可能性を実現するよう教えてくださるでしょう。

将来に不安を感じる時には、キリストに頼って下さい。キリストを愛して下さい。そして、今は隣人たちの中におられる主に仕えてください。そうすれば豊かな生命が、いつかあなたのものとなるにちがいありません。

高齢者の方々へ

3 愛する高齢者の皆さん、今度は皆さんにご挨拶申し上げます。皆さん方は、人生のねうちが、その人の持っている物や能力によって決まるのではなく、その人がどんな人であるかによって決まるということをもつて証言される方々です。皆さん方の人生は、世代が続々とつづいていることを表わしていますし、また、新しい出来事や発見の数々を評価できるだけの展望を持っていますから。みなさんの物の見方がたとえ一むかし前のものであったとしても、その考え方は今の時代にも大きく貢献しています。(…)

みなさんが率先して生活の質を向上させ、特に適切な住宅環境を整えることに努力されたことを聞いて、素晴らしいことだと思いました。一九八三年に刊行された家族の権利についての章の中で、教皇庁は次のように述べています。「お年寄りも自分の家の中で、またそれができなければ適正な施設で余生を穏やかに過ごすことのできるような環境に囲まれ、自分の年齢に似合った、また社会生活に参加できるような活動を、追求する権利がある。(Art. 9)

年をとると、どうしても衰えがでてきます。昔は楽しんでできたことも、今では無理なことになってしまったかもしれません。手足も以前のようにしなやかではなくなつたように思われるでしょう。記憶力や視力も思うように働いてくれません。こうして家族との世界や自分をとり巻いている世界、かつては馴染深かった世界が、自分から離れていってしまうように感じるかもしれません。また、長い

間ずっと親しんできた教会さえもが、この再生の時代を迎えてどんどん変わって行くため多くの方々とはまどいを感じておられるのではないのでしょうか。けれども、たとえ変化や弱さを感じても、みなさん方はだれにとっても素晴らしい宝です。社会は皆さんを必要とし、教会もまた皆さんを必要としています。



たしかに以前と同じように働くことはできないかもしれませんが。しかし、何にもまして大切なのは皆さんの人格です。老年期はこの世の人生の冠と言える時、皆さんが蒔かれた収穫をかりとる時、以前にもまして、他の人々に自らを与える時なのです。

確かに皆さんは大切な方々です。何人もそれを否定することはできません。一生の間あずかってきたごミサの数々、敬虔な聖体拝領、捧げてきた沢山の祈り、こうしたことによって、私たちに豊かな贈り物を授けてくださったことが可能です。私たちに皆さん方の経験や見識が必要です。皆さんを支え、その

光となり続けている信仰が、私たちには必要なのです。辛抱強く待ち、信頼し続ける皆さん方のお手本がなければなりません。皆さんが抱えている成熟した愛、喜びも悲しみも生き抜いてきた皆さんの人生の美りである愛を、私たちに示してくれなければなりません。私たちは皆さん方の知恵を頼りにしています。この不安定な時代にもみなさんは私たちに確かなものを与えてくださることができからです。みなさんは精神のより高い価値に従って生きるようにと気づかせてください。

このような価値が、どの時代の人々とも私たちを結びつけるのです。決して古びてしまうことはありません。ですから、自分のもつ尊さに目覚めてください。そしてもう一度、われらの主イエズス・キリストに人生を捧げてください。今まで以上に主をよく知るためにもっと時間をさくようにしましょう。祈りの時には主のお言葉に耳を傾けてください。主は皆さん方が弱り、悲しみ、苦しんでいる時におっしゃってください。私はよい牧者で、自分の羊を知り、私の羊もまた私を知っている。(ヨハネ10・14)と。日常生活の試練のときには主は皆さんのすぐそばにおいでになります。ですから皆さん方は、十字架の道をたどりながら、主の忠実な仲間であるよう努めてください。皆さんがこれから耐えていかねばならない困難の数々は、神が用意されたご計画の中にすでに予定されていたものであるということを、決して忘れないでください。

障害者の方々へ
4 さて今度は、様々な障害に苦しんでおられる方々と、その世話をしてくださる方々にお話したいと思います。まず最初に、立派な諸機関、諸協会、諸団体の方々の斡旋によって、(…)この障害やハンディキャップをもつ兄弟姉妹に示されたあたたかい心遣いに感謝

いたします。
何らかの形で障害をもっている兄弟姉妹の皆さん、人の値うちや尊さというものは、身体や知能が優れていることにあるのではなく、尊さは、一人ひとりの人間が神によって造られ、御子イエズス・キリストの御血によって贖われたという根本的な事実によるのです。神は皆さん方一人ひとりを名ざしでお呼びになります。神がみなさんに望まれることは、みなさん方一人ひとりが社会に貢献し、人々の奉仕を受けながらも人生を精一杯生きることにあります。神は父の心で、健康な人も病気の人も、障害者もハンデをもった人も、そして強健な人も、同じように抱き寄せてくださいます。

時にはすっかり気がめいってしまうこともあるでしょう。けれどもそういう皆さん方と今日ここに一緒にいることができて、私はよろこびに満たされています。私は皆さん方に、キリストがみなさんを愛していられること、そして教会と教皇もまたみなさんを愛していることを伝えたくてここにきています。皆さん方はイエズスの特別な友人です。イエズスはみなさん方一人ひとりに向かって次のようにおおせになつています。「労苦する人、重荷を負う人は、すべて私のもとに来るがよい。私はあなたたちを休ませよう。私は心の柔和なへりくだった者であるから、くびきをとって私に習え。そうすれば靈魂は休む。私のくびきは快く、私の荷は軽いからである。(マテオ11・28-30) キリストはみなさんに、十字架をになうのを助けに来て欲しいと頼んでいらつしゃいます。かつてキレネのシモンが果たした役目を、今、皆さんは果たしているのです。みなさんの模範によって私たちは、イエズスの御苦しみと一致し、人生に喜びを見出すことを教わります。

見出すことを教わります。

説教・講話・書簡等の抄訳

信仰に生きる勇氣

喜びの源

激励と希望の言葉が欲しいと、みなさんは私に要求されました。それは、毎日ほとんど解決できないと思われるような問題に直面しているからでしょう。(…)

みなさんは、若者に固有な感受性をもって世界中で見られる不正義に心を痛めておられる。隣人の孤独、たいていは高齢者であるが、みなさんの仲間でさえ感じる孤独、ほんとうの友情を求めても見つけ得ない苦しみ、往々にして弱者ゆえに負わされる困難、不正な偏見から生まれた批判に耐える苦しみなど。

邪魔者扱いされている、またこの種の問題について教会の助けを十分に受けていない、と感じておられる。しかし、それでもなおかつ、続けて信じていたとも思っておられる。

みなさん、大切なこと、それは信じ続けることです。列挙された困難、また人生にはつきものの色々な難儀を解決する秘訣は、信仰なのです。使徒聖ヨハネも同じ経験をされたではありませんか。聖ヨハネは初代の信者に思いを伝えています。世に勝つ勝利はすなわち私たちの信仰である。(ヨハネ①5・4)

注目してください。このように語るヨハネは当時の権力者たちによって圧倒されかけていました。それにもかかわらずヨハネの言ったことは本当だったのです。これは何世紀を経た今も確認できる事実です。今日でも、主に愛された弟子と同じ経験をしている人がいる。

(…) みなさん、キリスト教が生きてきた二十世紀という時の流れは無駄ではなかったことを知ってください。歴史を振り返り数々の文明に目をやると、それらの底にキリスト

教のパン種のあることがわかります。そこで、みなさんへの私の第一の返答はこれです。(勇氣を出してキリストを信じなさい)。キリストと一緒にあれば、こんにちがかかえる大問題に立ち向かいそして解決できることでしょう。(…)

みなさんのキリスト観

教会は規則や法律を發布するだけである。みなさんはこう考えていると教えてくださいました。教会はあらゆる分野で壁ばかりを築いている。たとえば、性の問題、教会の組織、教会における女性の場など。その上でみなさんが導き出した結論は、キリストの言葉から受ける喜びと教会の厳しい圧迫との間に根の深いギャップがある、というものでした。

みなさん、はっきりと言わせてください。私はみなさんが善意から話しておられると確信しています。ところで、みなさんのキリスト観はほんとうのキリストの姿と言えらるでしょうか。福音書によれば確かに、すこぶるきついキリストの姿が見えます。キリストは根本的な改心(マルコ1・5参照)、地上の善からの離脱(マテオ6・19、21参照)を要求なさっている。他人の過失を赦せ(マテオ6・14参照)、敵を愛せよ(マテオ5・44参照)、悪人に逆らわずたえよ(マテオ5・39参照)、さらには、自らの命を犠牲にしても隣人を愛せよ(ヨハネ15・13参照)ともおおせになる。とくに性に関する事柄になると、キリストのきっぱりとした態度が見られます。結婚の不解消性を主張し、心のなかだけの姦淫でさえ、

もつてのほかだとお教えになる。目や手がつかずきになるなら、抜き出せ、切り捨てよ(マテオ5・29参照)ともおおせになっている。衝撃を受けぬわけにはいきません。

このように明確なキリストの教えを知りつつ、結婚生活、墮胎、婚前交渉、結婚外交渉、同性愛などの点について、(放任的なキリスト)を想像することができでしょうか。キリストから直に教えを受けた初代教会は、決して(放任的)ではありませんでした。聖パウロの書簡を見ればこの点は明らかです。(ローマ1・26、コリント①6・9、ガラツィア5・19その他参照) 使徒聖パウロの言葉に、あいまいなところはありませぬ。それらは神の靈感を受けた言葉です。いつの時代になっても教会にとって守るべき事柄なのです。教会は、福音の光に照らされて主張します。一人ひとりの人間すべてが、尊敬され愛される権利をもっている。人間とは掛け替えのない存在です。教会が教えを宣べるとき、具体的な人について判断を下すことはありません。しかし、根本的な原則(原理)を考えると、善悪の区別は明らかになります。放任主義が人を幸せにするというのは嘘です。人間が自らを達成できるのは、神の似姿としての人間の尊厳を守るために要求される事柄を受け入れるときだけなのです。

教会の義務

教会が愉快でないことを言うのは、そうする義務があると知っているからです。忠誠を保つ義務を果たしているのです。一般的なことだけにとどめておけば、その方がずっと楽にはちがいない。しかし時として教会は、イエズス・キリストの福音に照らして、あくまでも理想を堅持するのが義務である、と考えます。たとえ、時流に逆らっても。

福音の使信はよろこびの使信ではないのでしょうか。その通りです。しかし、なぜそう

なるのだろうか。答えは簡単、ひとことですが中身は海より広いと言えるでしょう。すなわち、愛。(…)

みなさん、これこそキリストに従う生活の秘訣です。キリスト教的な生活は首尾一貫した、よろこびに満ちた生き方です。キリストに対する誠実でパーソナルな深い愛、これが秘訣なのです。(…) この愛を見つけてください。そうすれば困難もさほどの困難ではなくなり、聖アウグスティヌスの言葉を味わってくださいます。「愛があれば、うんざりすることがなくなるか、飽きや疲れそのものを愛するようになるかのいずれかである」(De bono viduitatis, 21, 26参照)

そこで、私の答えを申しませう。(キリストを愛し、教会がキリストの名によって要求することを受け入れてください。これらの要求は、創造主であり贖い主であらせられる神から来たものです。日々の生活のなかで、これらの要求を受け入れなさい。そのねうちがわかるでしょう。このねうちがよくわかるためには、神のおこばに耳を傾け、ご聖体を通して復活されたキリストに出会う必要があります。そして、この出会いを実現させるためにお勧めします。赦しの秘跡を大切にしてください。(…)

信仰は挑戦を求める

若いみなさん、信仰は挑戦する態度を要求します。そうしなかったことはありません。今日、キリスト者として生きようとするれば、数々の困難にぶつかります。しかし、困難は昨日もあつたし、明日にもあります。明日の若者たちはまた別の困難に出会うことでしょう。キリスト者であるということが安逸を意味したことはなかったし、将来そうなることもありませぬ。

私は敢えてみなさんにたずねたい。キリストを選ぶという決心はそれ自体すこぶる魅力

不変の教え

国際青年年にあたって(II)

“青春という宝”

福音書のテキストの最後の部分から話を始めましょう。青年は悲しそうに立ち去って行く。「彼は大金持だったから。」

この表現が、青年の持っていたあるいは相続するはずの、物質的な富を指していることにまちがいはありません。このような人もいます。しかし、これが皆にあてはまるわけではありません。ということは、福音史家はまた別のことを意味しているのではないのでしょうか。それは次のような点です。すなわち、「青春そのものが、物質的なものとは関係なしに、人間の宝」であり、若い男女の宝なのだということ。実にほとんどの若者が青春時代を貴重な宝として過ごします。常にかか例外なくとは言わずほとんどと言ったのは、世の中には何らかの理由で青春を宝として経験できない人もいるからです。このことについては後ほどお話しすることにしましょう。

とにかく、一人ひとりが、生涯の中でも特別な時期に経験する貴重な宝として、青春を考えてみる動機は充分あります。青春とは明

私のぞみです。(…)

現代世界のなかで道を見失うことなく、福音の教えに合った人生を楽しむ送るために、ぜひキリストにしがみついで忠実を保ってください。キリストの御母であり私たちの母でもある聖母マリアからも離れないでください。聖母マリアは神のみ旨に全てを委ねるといふ点で私たちにとって模範であります。聖母のかたわら歩むならば、みなさんの未来に向かって一歩一歩、確実によろこびにみちた歩みが続けることができるでしょう。(五・十四)

らかに幼年期とは異なる時期であり、幼年期のあとに迎えるもの、壮年期とも異なるものです。なぜなら、青春時代とは「私」という人間と、「私」のもつ特性や能力をとりわけ熱心に発見しようとする時期であるから。若者は、個性の発達を内側から見つめるとき、特別の、ある意味では唯一無二とも言える個人の可能性に目覚めて行く。そしてそこには、言わば将来の人生の計画がことごとく刻まれていると言っても差支えないでしょう。人生そのものが、その計画を成し遂げる過程、つまり自己完成のときなのです。

これはもちろん、様々な面から考えてみなければならぬ問題ですが、かいつまんで言えば次のようになると思われます。青春という宝は、先ほど申し上げたような形で、はっきりと現わされるといふこと。青春とは、発見の時期であると同時に、造りあげ、選択し、予想し、個人的に一番最初の決断を下す時期です。この決断は、下す人自身にとって将来を左右する大切なものであるだけでなく、社

会にとっても大変重要な決断です。福音書に登場する青年は、まさにこのような局面に立っていました。青年のイエズスへの質問からこの点は想像できます。そこで、場面の最後にて「大金持」という言葉についても、実はこの宝とは青春そのものを指しているということがわかるのです。

ここで、疑問が一つ湧いてきます。青春という宝のために、人は否応なしにキリストから離れて行かなければならないのか。もちろん福音史家はそうは言っていない。福音書をよく読んでみれば、むしろ別の結論が出てきます。キリストから離れることを決めたのは、青年の持っていた外面的な富、財産のためであって、決して彼自身(の若さ)のためではなかったのです。青春という時期に秘められた内的な宝を持つ青年としては、キリストのもとへ行きました。みずからのライフプランに直接関わるあのような質問をさせたのも、やはり青春という宝だったはず。「私はどうしたらよいのでしょうか、永遠の生命をうけるために、私はどうしたらよいのでしょうか、この一生を価値ある有意義なものにするためには、どうすればよいのでしょうか」と。

みなさん、一人ひとりのもっている若さの宝であることは、このような質問に表われます。人は一生の間、この問いを自分自身に投げかけ続ける。なかでも青春時代には、これは殊に緊急の問題であるため執拗にくりかえされます。それはそれで良いことです。このような問いかけは、個性が発達するときの力強いエネルギーを示しているにちがいない、それは若者特有のエネルギーであるから。みなさんは、時には焦燥にかられながら自問するかもしれません。しかし同時に、その答えが性急であつたり、うわすべりの答え方であつたりしてはならないこともよくおわかりでしょう。特別の、しっかりとした重みのある答えであるべきです。質問が一生を左右する

答えを求める事柄であり、全存在にかかわってくる問題ですから。

みなさん方と同じ年頃で、子どもの時から苦しみを背負ってきた人たちにとっては、この問いかけは特に重要と言えます。何らかの肉体的な欠陥や弱さから、またある種のハンディキャップや制限によって、あるいは家庭の問題や社会の問題の中で、苦しんでいる人々のことです。このような人々の精神が正常に発達しているのであれば、人生の価値や意味についての問いかけは、彼らにとってより一層不可欠であり、ひとしお厳しいものになるにちがいないと存じます。存在すること自体の

□青春という宝のために人はキリストから離れねばならぬのか。福音史家はそうは言っていない。

苦しみが、生まれたときからこの問いを彼らにつきつけてくるからです。世の若い人々の間にこのような若者たちがどれほど沢山いることでしょうか。いろいろな国に、社会に、そして一つの家族の中に、いかに大勢の人々が、子どもの時から施設や病院での生活を強いられ、自分は誰の役にも立たないと感じ始めざるを得なくなるのでしょうか。自分では何もできない状態におかれているから。

それでも、この人々の青春が、同じように宝だと言いうことができるでしょうか。一体だれにこの質問を投げかければよいのだろうか。誰にこの重要な問いかけを向けることができるのでしょうか。この問いかけを向けるにふさわしいお方は、キリストをおいて外にありません。誰一人、キリストの代わりはできないのです。(第一回は五月号にあります。)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円 一年予約八〇〇円送料五〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393

「印章展」開催にあたって

この度、印章展を開催することができ、本
 当にうれしく思っています。この展覧会は、
 先任者レオ十三世が自発教令を發布の上、
 一八八四年に設立された、古文書学、文献学、
 考古学のバチカン校の百年を記念するために
 ふさわしい催しです。(…)よくご存じのよう
 に、バチカンの秘密古文書館に保管されてあ
 るが余り知られていない第一級の文化遺産に
 光を与えてくれるのが印章学であります。印
 章が(文化の小宇宙)と称されるのはまこと
 に当を得たことです。印章は、歴史、法律、
 芸術にとって重要な資料を提供してくれるか
 らです。今回の印章展の狙いは、文化、歴史、
 法律、芸術の脈絡のなかで印章をいかに(読
 む)かを知ることです。

秘密古文書館の役目

数多くの印章が、その信憑性を保証する文
 書と共に保管されており、専門家の研究のた
 めに提供されていること自体、バチカン秘密
 古文書館の役割のひとつを果たすことになり
 ます。この分野でいかに役に立ってきたかは
 古文書館利用者が日々確認していることです。
 古文書館には、世界最多、最重要の金印を
 保管しています。皇帝、王、王子などの印章
 に混ざって一つだけ、最も小さい、教皇の印
 章があります。

この度はヨーロッパ文化のみならず、中国
 やアラブの印章も展示されていますが、す
 ばらしいことだと思えます。教会の普遍性、
 カトリック性を示してくれるからです。あの
 有名なイタリヤ人マルコ・ポーロは当時すで
 に中国の印章について書き記していました。
 「紙幣や硬貨はすべてあかも純金か純銀で

できているかのように威厳と権威をもって作
 られていた。紙幣や硬貨の各々に、製作担当
 の役人が自分の名前を記し、自分の印を押す。
 そのあとで、役人の責任者が朱印を押す。朱
 印は刻印されるのである。かくて、真正正銘
 のお金が誕生する。偽造の罪は死刑である。」

印章は宝

印章は、その歴史、法律、芸術、文化面の
 重要性から言って、真の宝でありますから、
 細心の注意を払って守らねばなりません。良
 い状態で保管すべきことは言うまでもなく、
 破損や損傷を避けると同時に、万一損傷のあ
 る場合は補修できるようにしておかねばなり

人間が召し出しを全うするためには、働く
 だけでなく、日々の労苦のいわば魂として果
 たすべきもう一つの点に注目しなければなら
 ない。私が万(一)この点を大声で主張しないと、
 労働者の尊厳を十分に認めないのみならず、
 キリストの啓示が有する真理の力を弱めてし
 まうことになり得ます。仕事という仕組みのなか
 で主の命令、つまり七日目
 の休息をもとにした旋(創
 世の書2・1-3)が響き
 わたります。安息日を聖と
 することを常に思い出せ。

六日の間働いて自分の仕事をせよ。七日目は
 神なる主の安息日である。どんな仕事もする
 な。(…)主は六日の間に、天と地と海と、そ
 こにあるものすべてをつくり、七日目に休息
 された。そのために主は七日目を祝して、聖
 なる日と定められた。(脱出の書20・8-11)
 安息日後の第一日目に主が復活されてから

日曜日について

古文书館のもう一つ称賛に値する計画は、
 印章の複製の作製であります。複製のおかげ
 で貴重な印章学の遺産を後世に残すことがで
 き、学者の研究調査を可能にできます。複製
 は効果的な手段であるだけでなく、往々にし
 て唯一の手段と言えるでしょう。
 他のバチカン文書と同じく、印章は教会の
 普遍性の証人であり、また種々の民族の文化
 の保存と発展に教会が大きな関心を寄せてい
 ることの証しでもあります。この点は今日も
 議論の的となっており、すべての人が理解し
 ているとは言えないようですが、教会は常に
 文化の問題に深い関心をもっています。
 英国の習慣と文化に対する大聖グレゴリオ
 の態度や一六五九年に聖省が發布した指示を
 見ればこれが明らかになります。「暴力は絶対
 にふるわないように。人々の儀式、習慣、し
 きたりが、カトリックの教えと健全な慣習に

日曜日が主日となりました。日曜日とは、働
 く人、とくに重労働に従事する人が、自分の
 仕事の意義を再発見し、自らの手になる仕事
 を神に感謝し、仕事ゆえに離ればなれになっ
 ていた愛する人たちと特に一緒にときを過ご
 し、病に伏す人や困っている人を訪問するた
 めに、まことに貴重な日です。なかでもキリ

スト者は日曜日の聖体祭儀という祝いの晩さ
 んに招かれています。キリストの共同体とし
 て集う労働者は、自分に力を与えてくれるは
 ずの現実を感じとり、またそれに与ります。
 司祭は、神のおことばを説いたあとで、パン
 とぶどう酒をかかけ、神にささげて祈ります。
 「神よ、あなたは万物の造り主、ここに供え

反しないかぎり、無理に変更を説得しないよ
 うに。フランス、スペイン、イタリヤなどの
 ヨーロッパの国を中国に移すほど馬鹿げたこ
 とはないだろう。あなたたちが導入するのは
 このような固有の文化ではなく、信仰です。
 諸国民の儀式や習慣が悪いものでない限り、
 信仰は、それらを拒絶したり、それらに害を
 与えたりすることはなく、かえって保存し、
 固めるのに力があります。それゆえ、地方の
 習慣とヨーロッパの習慣を比較しても仕方が
 ないのです。全力をあげてあなたがたの生き
 方を地方の習慣に合わせてください。聖省
 は中国とインドネシアでの宣教についてこの
 ように話しています。
 今回の展覧会が、バチカンに保存されてあ
 る貴重な印章の遺産を広く知らせるだけでな
 く、教会が文化と科学に寄せる並々ならぬ関
 心を知っていただくために役に立つことを希
 望しています。(二・十九)

パンは、あなたからいただいたもの、大地
 の恵み、労働の実り、私たちの命の糧となる
 ものです。(…)ここに供えるぶどう酒は、あ
 なたからいただいたもの、大地の恵み、労働
 の実り、私たちの命の糧となるものです」と。
 神はイエズスにおいて、私たちの仕事の本当
 の意味を知る恩寵をお与えになります。仕事
 は時として苦しみをともないますが、今はも
 う呪いでも実りのない汗のもとでもなく、キ
 リストの贖いの犠牲に与ることなのです。イ
 エズスの場合と同じく、ときには大変骨の折
 れる仕事も、犠牲の祈りとなりました。自分
 自身と人々の心から悪を取り除き、よりよい
 社会建設への努力のなかに神の国を預言し、
 神の国を先取りすることができる、祈りとな
 ったのです。

話を終えるにあたり、みなさんがキリスト
 の犠牲に一致して仕事を祈りに変えてくださ
 るよう、お願いしたいと思います。(三・十九)